

# 医療ルネサンス

No.6665

## いのちの 値段

## 人生の最終章

3 / 6

# 愛犬の死……地域が支える

7月31日早朝、愛犬のテツが死んだ。18歳。独り暮らしで認知症の端野マツエさん(82)は、唯一の家族を失った。テツの死を受けて、滋賀県東近江市の永源寺地域(人口5400人)で、

多くの人が奔走した。40年近いマツエさんの独居生活の半分は、テツと共にあった。朝夕の散歩。親子のような会話。テツはベッドの上、マツエさんはコタツか床で寝た。テツの具合が悪くなると、マツエさん

も体調を崩した。マツエさんは、薬を飲み忘れる。お金の管理も掃除も料理もできない。心臓や気管支や膝が悪い。生活保護を受けている。そんな暮らしのなか、テツこそが生きる支えなのだ。永源寺診療所長の花戸貴司さん(47)ら、周囲のみんなが分かっていた。だから、老いたテツのことも心配だった。

「テツ、起きなあかんで」。マツエさんが、二間しかない自宅の6畳間で、ベッドに横たわるテツを何度も揺する。テツが息をしないことが理解できない。市内に住む塗装業のおい子(37)夫婦と子どもたちは、マツエさんを伴ってお墓を掘り、テツを埋めた。△テツは死にました。18歳まで長生きをしてがんばりました▽と書いた、写真付きの紙も部屋に貼った。マツエさんが深夜、テツを探しに外出しないよう、記憶や視覚に訴えた。



生前のテツ(端野さんのおい子提供)



近所の人に支えられて散歩をする端野マツエさん(左)。奥で医師の花戸さんが見守る(滋賀県東近江市で)。(前田尚紀撮影)

お隣の主婦(60)は、寝室をマツエさんの家側に移し、見守った。テツがいよいよ6畳間に通った。ケアチームも、31日午前8時には、全員がテツの死を知った。「仲間」の死に訪問看護師や薬剤師、ヘルパーも泣いたが、マツエさんの体調や服薬、食事量などの確認がいっそう進んだ。社会福祉協議会やボランティアの人も、「テツもう死んだんやで」と、同じ言葉をもツエさんにかけた。医師の花戸さんは一歩後ろに下がりが、ケアのバランスの崩れに気を配った。事実、お見舞いの菓子などが増えたマツエさんは1か月で体重が4kg増え、心臓や膝の負担が増した。田舎の永源寺地域では、都心のようなプライバシーは保てない。認知症への偏見もある。けれど、そうした煩わしさと引き換えに蓄えてきた「互助」の力が確かにある。「どこにも行きたくない。ここがいい」と言うマツエさんの思いを可能な限り支えるという「覚悟」を、みんなが持つ。マツエさんはデイサービスにも通っているが、生活保護のため負担はない。テツの死後、マツエさんは「テツのために頑張らな」と、しきりに口にしたという。記者が「誰に向けた言葉?」と尋ねると、「全部忘れた!」。マツエさんは、どこまでも明るい。